

府中市美術館 運営協議会 答申書（草案）

－ 府中市美術館 第2期（2020～2039年）の展望について －

令和2年8月

府中市美術館運営協議会

【はじめに】

私たち府中市美術館運営協議会は、諮問事項「府中市美術館 第2期（2020～2039年）の展望」について、平成30（2018）年12月から令和2（2020）年8月までの2年間にわたって計4回の協議を重ねた。

府中市美術館は、平成12（2000）年の開館以来、20年にわたって個性的かつ積極的な活動を展開してきた。独創的な視点から構成された数々の企画展は、多数の鑑賞者を迎え好評を博すとともに、全国の有識者からも高く評価されている。

公開制作やアートスタジオ、小学校・中学校美術鑑賞教室といったさまざまな教育普及活動は、多彩な年齢層に対して美術と触れ合う機会を提供し、市民の文化的生活の充実に多大な貢献を果たしてきたように思われる。

しかし一方で、開館以来の年月を重ねたことで、施設の老朽化や不具合なども散見されるようになってきた。

また、今後20年間の活動を考える上では、時代や社会の変化に適切に対応しながら、さらなる所蔵品の充実、事業の拡充、施設の改善を図る必要がある。

本答申書は、府中市美術館の20年間の活動を踏まえ、これまでの活動のなかで継承すべき点、拡充すべき点、改善すべき点などを指摘することで、今後20年間の府中市美術館の理想的な在り方を提言するものである。

【作品収集活動】

作品の収集とその適切な保存・管理は、美術館の基盤となる活動であり、極めて重要である。

府中市美術館では、「江戸時代の絵画」「明治から昭和にかけての洋画」「府中及び多摩にゆかりのある作品」など、これまでに約2千3百点の作品を収集所蔵してきた。それらの作品は、常設展示や所蔵品企画展などで随時公開されるほか、他館への貸し出しなどでも活用されている。平成29年度末には府中市美術品購入基金2億円が新設され、平成23年度以降途絶えがちであった作品購入が行える態勢となったことは、たいへん喜ばしい。

しかし、府中市美術館のコレクションは、いまだ多くの発展の余地を残している。今後は、これまで収集してきた作品群の不足部分や周辺領域を補完し拡充するような作品の収集を進める一方で、市民に広くアピールし、コレクションの核となるような名作の獲得も望まれる。市民が誇りにでき、皆がよく知っている名作の獲得など量と質の両面から府中市美術館のコレクションの充実を図るためには、機動的で継続的な作品購入が維持できるように、美術品購入基金の維持とさらなる積み増しが必要である。

また、これらのコレクションには、収蔵作品の適切な保存・修復・管理が必須である。市民の貴重な文化資源を永年にわたって保持するためには、作品修

復のための経費を十分に確保し、効率的に執行していかなければならない。さらに、所蔵作品のデータを整備・完備して、それをウェブなどで公開することで、内外の美術愛好家の利用に資するように、積極的に取り組んでもらいたい。そのための予算拡充も大いに望まれる。

【展覧会活動】

作品収蔵と展覧会の開催は、美術館活動の両輪である。

府中市美術館では、「へそまがり日本美術」（平成31年3月）など日本近世絵画をユニークな視点で紹介する展覧会、「おかえり『美しき明治』」（令和元年9月）など日本近代絵画の動向を独自の切り口でとらえた展覧会、「青木野枝展」（令和元年12月）など現代美術の現況を紹介する展覧会、夏休み期間にあわせて開催する子ども・家族を対象とした教育普及的内容の所蔵品企画展など、多彩で独創的な企画を積極的に展開してきた。これらの展覧会は、市民をはじめとする多くの来館者を集めるとともに、テレビ・新聞といったマスメディアで広く取り上げられるなど文化史専門家の間でも高く評価されている。

これらの実績は府中市美術館の最大の強みであり、今後も学芸員の企画力あふれる独自展覧会を継続して開催していくべきである。さらに、開館30周年、40周年といった節目の折には、美術館の企画力を最大限に発揮するとともに、市民の期待に応える大規模な展覧会の開催を望む。

学芸員が企画内容の充実により専念するとともに、来館者に優れた展示空間と鑑賞体験を提供するためには、美術館内に展示デザインのための専門スタッフを増員配置することも、ひとつの方策である。

その一方で、ウェブの充実をはじめとする情報環境の変化にも呼応した展示活動の紹介などを、模索してほしい。新型コロナウイルスの感染拡大のため閉館を余儀なくされた期間に、オンライン美術館として素早い対応ができたことはとても良いことである。これからも、感染症や災害などのリスク発生時でも、美術館が提供する市民サービスの著しい低下を招かないような方策を、検討していく必要がある。

【教育普及活動】

教育普及活動は、当美術館と市民ら利用者を多角的な方法で結びつけるために、欠かせない活動である。

府中市美術館では開館以来、ユニークかつバリエーションに富んだ教育普及活動を展開してきた。

現役の美術家を招聘し美術館内で継続的に活動してもらうことで作品制作のプロセスとテクニックを実見してもらう「公開制作」は、全国の美術館のなか

でも類を見ないものであり、市民と美術の接点として極めて意義深い。

府中市立の小学校・中学校と連携した「美術鑑賞教室」では、児童生徒に美術鑑賞の機会を提供し、着実な教育成果を上げている。

成人への教育普及活動は、より充実してもらいたいとの指摘が以前よりなされているが、この課題を解消すべく具体的な施策を提示し実行して欲しい。土曜日に定期的を開催する「アートスタジオ」では、「美術館の楽しみ方」「ワークショップ」など、多彩な年齢層に対してトークプログラムや制作プログラムを展開している。これらを継続しながら、学習要求の高い市民（美術関係者や高齢者層など）も、どんどん引き込んで欲しい。

今後はこれらの活動に加えて、より幅広い年齢層に対して重層的に教育普及サービスを提供していく必要がある。例えば現状では、小学生向けのプログラムが極めて充実しているのに対して、高校生・大学生に対するものは手薄に感じられる。同じように、高齢者を対象とした事業や外国語話者を対象とした事業など、美術館が文化・言語・国籍や年齢・性別・能力などの違いにかかわらず、出来るだけ多くの人が集う場となるよう、一層の工夫が求められる。

【施設整備】

作品の保管や展示といった美術館の基本的な活動を維持し、来館者の鑑賞体験・文化体験の満足度を上げるために、施設の整備は不可欠である。

開館以来20年を経過した府中市美術館では、残念ながら施設面での老朽化や不具合が散見される。他の美術館ではおおよそ30年目までには大規模な改修の必要性に迫られている。府中市美術館においても、長期的な視点に立った施設の長寿命化と、時代に呼応した設備の充実が求められる。

作品保存のためには、温度や湿度を適切に制御する空調設備の補修や更新が必要であり、セキュリティ設備の更新や低燃費化も欠かせない。予算をにらみながら機器の検討交換をはかることで、適切で精密な美術館環境の構築が可能となるとともに、ランニングコストの削減も図れよう。

照明設備においても、多発する不具合を解消するとともに、ハロゲン灯を含む白熱灯や蛍光灯などの従来型照明が将来的に廃止されることに対応しながら、良好な鑑賞環境へと改善する必要がある。展示室はもとより収蔵庫や事務スペースを含む館内のすべての照明設備を低燃費のLEDに変更し、ランニングコストの大幅な削減、設備の長寿命化、発熱量の抑制による空調設備への負荷軽減を図ることは、有効な手段である。

美術館南側にある盛土は、現状、美術館の正面観を大きく妨げている。この盛土を撤去し多目的な広場に再整備することで、都立府中の森公園とも一体となった新たな活動の場を設け、敷地を有効活用することが可能となろう。カフェテリアの拡充など大胆な改修も視野に入れた検討を望む。

現状の臨時駐車場は美術館からやや離れた場所にあり、利便性は必ずしも高くはない。美術館北側の基地跡地整備に際しては、可能ならば現在地よりも美術館に近接した場所に駐車場を整備し、利便性の向上を図ることが望ましい。いずれにせよ美術館外の公園運営機関との交渉、連携が必要となろう。

高齢化社会がますます進行するとともに、ハンディキャップを持つ方々の社会進出が望まれるなか、美術館の施設もさまざまな来館者に対応したものに更新していく必要がある。展示室がある美術館2階からの降下用エスカレータの新設やエレベーターの増設、美術館隣接地への駐車場の確保など、より一層のバリアフリー化を進めなければならない。

今後20年間の間には、さまざまな社会情勢の変化が訪れることと思われる。美術館は、それらの変化に呼応しながら、施設の改善と充実を常に図っていかなければならない。

【広報活動】

美術館の活動をより多くの方々に周知し参加してもらうためには、積極的で効果的な広報活動が不可欠である。

現在の府中市美術館のホームページは、市の行政サイトの派生リンクでしかなく、他の美術館に比べて大きく見劣りがする。

令和2年度中にホームページのリニューアルがなされるとのことであるが、動画で館内紹介ができるなど、デザインや操作性に優れた十分な情報容量のものになることを期待する。将来的には、展覧会や教育普及活動の情報ばかりでなく、所蔵作品や所蔵図書のデータ、動画を利用した館内紹介、SNSを活用した混雑情報発信など、ウェブを活用した広報活動に一層取り組む必要がある。

その一方で、美術館周辺はもとより、府中駅や東府中駅といった美術館へのアクセス拠点での案内広告、主要道路沿いでは美術館への交通案内や催事案内を掲出するなど、基本的な周知広報活動の拡充も必要となる。

具体的な施策として他に、マスメディアや地元近隣公共交通機関お知らせ看板、「183FUCHU FAN ZONE」「J.com ニュース」「ラジオフチュウズ」ACF(アーティスト コレクティブ フチュウ<ギャラリーやアーティストの集まり>)、地元商店街などを通して市内で美術館情報の周知を幅広く行っていくなど、住民環境に総合的に浸透させて行く必要があると考える。特に府中駅構内での告知看板は、電車を待つ人や帰宅する人の心に留まり府中市民には有効であると考えられる。

これらの広報活動を展開するにあたっては、ハンディキャップのある方や外国語話者への対応など、ユニバーサル・デザインの視点も必須となろう。館名のロゴを統一するなど、府中市美術館のイメージを統一的に伝えていく工夫も必要であると考えられる。

ウェブなどの新たなメディアと看板などの従来メディアの両面から、さらなる広報活動の充実を模索しなければならない。

【連携活動】

美術館は、それを取り巻くより広範な環境のなかにある社会的存在であり、周辺のさまざまな人々や機関との連携は、活動の一層の充実のために検討していかなければならない課題である。

府中市美術館は、都立府中の森公園のなかに立地し、周辺には府中の森芸術劇場、府中市生涯学習センター、府中市立中央図書館、府中市市民会館などの文化施設がある。これらの諸施設との連携を進めることは、府中市の文化の拡充に大きく寄与するものである。

小学校・中学校・高等学校・大学などの学校教育機関との連携、近隣をはじめとする全国各地の美術館と連携も、極めて重要と考える。美術館事業のベンチマーキングや他美術館情報を共有することで、利用者により満足のいく企画を考案できると思われる。

さらに、地元の若手作家の育成や、地域の美術資源の調査・活用など、地域社会との連携も府中市立の美術館として検討し取り組んでもらいたい。街の活性化を図ることも視野に入れながら、府中市の文化行政全体の主導的役割を担ってほしい。

【美術館と市民】

美術館と一般市民との一体感が深められていないという声がある。

広報活動や教育活動の問題点指摘は、平成24年の運営協議会の答申書以降、毎回進言されながら、あまり進展していないように見受けられる。

美術館本体の魅力が十分備わりつつあるなか、今後は展覧会や教育普及事業の実施にとどまらず、美術館は市民による支持母体の形成に力を尽くすべきであるとする。

企画展以外にも美術館への興味を惹きつけ、美術館の存在を内外に広く知ってもらうことは、府中市美術館のブランド力（知名度・信頼感・愛着）を上げるとともに、府中市の文化向上に寄与することになると考える。府中市と言えは「競馬場・刑務所」と言われる前に「美術館」と言われるよう、府中市美術館には大きな期待がかかっており、市民の誇りとシンボルになって欲しい。そのための予算の計上と専門的な人材も必要となる。

府中のアートシーンをより高めるためには、公募展や3年に1度開催の「ふちゅうトリエンナーレ」を恒例化し開催することも考えられる。こうした積極

的な取組みを府中市催事の一つとして定着させ、新進のアーティストの登竜門や、文化・芸術活動をしてきた人々と連携を深める場となって欲しい。

【おわりに】

府中市美術館は、開館以来の20年間にわたって極めて充実した活動を展開してきた。その背景には、単に美術館とその職員の努力にとどまらず、公立直営館として府中市全体の理解と協力のもと安定した運営を行ってきたことがあげられる。今後20年の活動をより一層充実したものにするためにも、今後もこの体制を維持していってほしい。

その上で、府中市美術館は、すべての市民に親しまれ、誇りに思われ、さらには府中市の文化的シンボルとなるように、その活動を行っていかねばならない。作品の収集、保存、展覧会、教育普及、調査研究といった基礎的活動においては、これまでの成果を踏まえるとともに美術館の本義を見失わないようにしながら、さらなる発展を望む。また、広報や連携、施設整備の面では、時代の変化を的確につかみながら柔軟な展開をしていかねばならない。

府中市美術館のより一層の発展を期待して、答申書を提出する。

令和2年8月

府中市美術館運営協議会

会 長	薩 摩 雅 登
副会長	谷 矢 哲 夫
委 員	寺 田 慎 吾
委 員	江 川 雄 一
委 員	上 村 貴 子
委 員	米 谷 一 志
委 員	隠 岐 由紀子
委 員	吉 田 裕 子
委 員	堀 江 一 男
委 員	松 林 眞 澄
委 員	栗 原 昭 良
委 員	松 浦 浩 司